様式 C-19

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25　年　6　月　14　日現在

機関番号：３２６２９
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2012
課題番号：２１５２０２８０
研究課題名（和文）メスメリズムとフェミニズム：1840 年代アメリカ・ルネサンスとボストンの女性文化

研究課題名（英文）Mesmerism and Feminism: Boston Women's Intellectual Movements in the Antebellum Period

研究代表者　庄司　宏子（SHOJI HIROKO）
成蹊大学・文学部・教授
研究者番号：50272472

研究成果の概要（和文）：

Ｆ・Ｏ・マシーセンが提唱した「アメリカ・ルネサンス」は19世紀アメリカ文学のカノンを形成した。しかしアメリカ・ルネサンスの思想的背景をなす超絶思想とボストンの進歩的女性たちとの関わりについては十分検討がなされていなかった。本研究は、1840年代半ばのボストンに存在したマーガレット・フラーを中心とするメスメリズムを信奉する女性たちのネットワークに注目し、女性たちのメスメリズム体験と同時代の超絶主義との結びつき、そこから生まれたフェミニズム思想をもう一つのアメリカ・ルネサンスの重要側面として捉え、マシーセンの白人男性作家を中心とするアメリカ・ルネサンス史の修正を試みた。

研究成果の概要（英文）：

This study aimed to clarify the involvement in and contribution to the American Renaissance by Margaret Fuller, Peabody sisters and other "transcendental" women who lived and moved in the intellectual circles in antebellum Boston. The idea of the American Renaissance and transcendetalism has been criticized for its overemphasizing a small number of white male writers and ignoring contemporary women's activities and contributions. Inspiring each other, these women ignited Transcendentalism, the America's first cultural awaking in the era of the nation's self-discovery and the Westward Expansion.

By addressing their spiritual and intellectual transcendence, this study shed a new light on the richness of the literary and political activities of antebellum Boston women and their relationships to the American Renaissance and Transcendentalism, which had been formed around the white male luminaries such as Emerson, Thoreau, Hawthorne, Melville, and Whitman.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	800,000	240,000	1,040,000
２０１０年度	700,000	210,000	910,000
２０１１年度	700,000	210,000	910,000

２０１２年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：英米文学
キーワード：アメリカ・ルネサンス、メスメリズム、フェミニズム

１．研究開始当初の背景

アメリカ・ルネサンスとはＦ・Ｏ・マシーセンによる1941年の著*American Renaissance: Art and Expression in the Age of Emerson and Whitman*に由来し、南北戦争以前の19世紀半ばに登場するRalph Waldo Emerson, Henry David Thoreau, Nathaniel Hawthorne, Herman Melville, Walt Whitmanによりアメリカ文学史上最高の文学が生み出されたとするもので、マシーセンのこのテーゼのもとにアメリカ文学史の枠組みが作られカノン形成が行われるなど、多大な影響を及ぼしてきた。従来、マシーセンのテーゼに対する批判がなされた。その批判の焦点となったのは、彼が取り上げた五人の作家たちはいずれも白人男性であり、黒人作家や女性作家が排除されていること、またマシーセンの本は第二次世界大戦のさなかに出ており、敵対国に対してアメリカの民主主義の喧伝のために文学が利用された側面があることなどである。マシーセンが排除したFrederick Douglass、Harriet Beecher Stowe、Emily Dickinson等をこの時代の重要作家として組み込むなど、アメリカ・ルネサンス史の修正が1980年代以降行われてきた。

しかし、アメリカ・ルネサンスの背景をなす思想として、常にアメリカ・ルネサンスと結びつけて捉えられてきた超絶思想についてはその修正は十分ではなかった。超絶思想はエマソンやソローを中心に論じられており、当時超絶主義者たちの機関誌*Dial*を編集し、その牽引役であったマーガレット・フラーについては、その死後のフラー・バッシングもあり、その思想の領域と意義を十分評価されているとはいえなかった。また超絶主義運動にはフラー以外にも関わった女性たちがいたが、その著作や活動はほとんど顧みられることはなかった。

実際、1830年代末から1840年代半ばにかけて、ボストンではマーガレット・フラーを中心とするメスメリズムを信奉する進歩的な女性たちのネットワークが存在した。しかし、Conversationsと呼ばれるフラーの一連の講義に参加した女性たちの活動はアメリカ文学研究の射程に入ってこなかった。特にPeabody姉妹（Elizabeth, Mary, Sophiaの三人姉妹）については、教育家であったElizabethを除くと、MaryはHorace Mannの妻、SophiaはNathaniel Hawthorneの妻としてのみ論じられ、その著作や思想に関する研究はほとんどなされていなかった。こうした女性たちの活動をいかに超絶思想に組み込み、アメリカ・ルネサンスの概念の修正を行うかは、アメリカ文学の重要な課題であった。

２．研究の目的

本研究は、アメリカ・ルネサンスおよびその思想的バックボーンである超絶思想に関わりながらも従来のアメリカ文学研究において十分評価されず、その著作もほとんど顧みられることのなかったマーガレット・フラーを中心とするボストンの進歩的女性たち（フラーの Conversations の参加者やピーボディ姉妹など）が記した小説、日記、エッセイなどを掘り起こし、その思想や活動を考察すること、そこから女性たちによる超絶主義運動への参与と貢献を明らかにすること、また女性たちの超絶思想とはどのようなものであったか、その質と広がりを捉えることを目的とする。

それにより、19 世紀の女性たちの活動を ideology of separate spheres により「家庭の領域」に閉じ込め、制限的にしか評価しえなかったアンテベラム期の女性史研究を、アメリカ・ルネサンスという文学史の主流に組み込むこと、アメリカ・ルネサンスをより総体的に捉え直し、Ｆ・Ｏ・マシーセンが唱えたアメリカ・ルネサンスの概念に意義深く重要な修正を加えることを目的とする。

３．研究の方法

日本およびアメリカの大学図書館に赴き、1840 年代のボストンでメスメリズムを信奉したマーガレット・フラー、ピーボディ姉妹、その他当時の女性たちの著作、雑誌文献、批評書を閲覧、入手した。そこから女性たちの互いの交流関係を読み取り、女性たちの知的ネットワークを辿った。女性たちとメスメリ

ズムとの関わりは、従来考えられてきたような頭痛や神経症などの病気治療としての側面ではなく、女性たちに身体を核とする力の感覚を与えるものであったことを解き明かした。女性たちは、自らの nervousness をメスメリズムの流体に感応する優れた神経回路をもつ身体と解釈し、肉体を超越した精神の拡張を説いた。そうしたフェミニスト的身体観を当時の女性たちの記した著作や日記から明らかにした。

また女性たちの記録から、彼女たちは自らの身体、社会、拡大する国家のなかで起こる様々な問題（人種、奴隷制度廃止運動、戦争、女性の地位など）とどのように向き合ったのかについての検討を、同時代の超絶主義運動の主流にいたラルフ・ウォルドー・エマソンやヘンリー・ディヴィッド・ソローとの比較、ナサニエル・ホーソーンのテキサス併合論およびメキシコ戦争に向かう時期に描かれた小説との比較しながら、アメリカの奴隷制度と国家の言説のコンテクストにおいて行った。さらに彼女たちの独特のメスメリズム解釈は超絶主義思想とどのように関わり、そこからいかにして独自のフェミニズム運動が生まれてきたのか、Conversations と呼ばれるマーガレット・フラーの一連の講義、ブルック・ファーム運動における実践のなかから、女性たちの思想とその活動の意義を考察した。批評理論の面では、ニューヒスリリシズム、フェミニズム、ポストコロニアリズムからなる研究手法に拠った。

４．研究成果

３で記した研究の方法によって得られた研究の成果は、論文や著書として著した。この研究により、マーガレット・フラーやピーボディ姉妹など超絶思想に関わった女性たちの活動から新たなアメリカ・ルネサンスの姿をあぶり出すことができた。そのことにより、従来のエマソン、ソロー、ホーソーン、メルヴィル、ホイットマンの５人からなる男性作家を中心にカノン形成を行ったＦ・Ｏ・マシーセンのアメリカ・ルネサンス論に対し、女性たちによるアメリカ・ルネサンスの思想的貢献を加えることで、南北戦争以前の 19 世紀半ばのアメリカ文学史・文化史に重要な修正を行った。

同時に、西漸運動とその国家の拡張の時代にあって、女性たちは帝国化するアメリカとどのように関わったのかを、ジェンダーと国家の視点において捉えた。またこれまで考察されることのなかったメスメリズムと女性の新たな身体観との関わり、そこから展開するフェミニズム思想を考察するという研究成果を得た。さらにアメリカによって支配され植民地化された国内外の地域（アメリカの西部、メキシコ、キューバなど）・民族・人種に関してなされた女性たちの著作を、ポストコロニアリズムの視点から捉え、批評するという研究領域を開くことができた。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

① 庄司宏子、「もう一つのアメリカ・ルネサンス――マーガレット・フラーとボストンの超絶主義的女性たち」、『成蹊大学文学部紀要』第 48 号、2013、pp. 57-84.

② 庄司宏子、「“Young America Movement”とホーソーン――“A Select Party”にみる The Democratic Review が牽引した時代」、『成蹊英語英文学研究』第 16 号、2012、pp. 39-51.

③ 庄司宏子、「『シンパシーの電気的な絆』と 19 世紀的な『視』のありよう」、『成蹊英語英文学研究』第 15 号、2011、pp. 29-36.

④ 庄司宏子、「“One-drop rule”の現在――アメリカにおけるパッシング小説」、『成蹊英語英文学研究』第 14 号、2010、pp. 15-28.

⑤ 庄司宏子、“Domestic Mesmerism: Hawthorne and the Emergence of the Middle Class in Antebellum America”、『成蹊英語英文学研究』第 13 号、2009、pp. 33-56.

〔学会発表〕（計０件）

〔図書〕（計３件）

① 下河辺美知子, 他、彩流社、『アメリカン・テロル』、2009、pp. 33-52.

② 大熊昭信, 他、風間書房、『グローバル化の中のポストコロニアリズム』、2013、pp. 153-180.

③ 庄司宏子, 他、法政大学出版、『絵のなかの物語―文学者が絵を読むとは』、2013、pp. 71-108.

６．研究組織

(1)研究代表者　庄司　宏子
(Shoji Hiroko)

成蹊大学・文学部・教授
研究者番号：５０２７２４７２